

遺跡における往時の様相の表現方法

内田 和伸（奈良文化財研究所）

1. はじめに

遺跡の保護においては、遺跡の本質的な価値を保存する技術とともに、その価値を分かりやすく正確に伝える展示技術や活用のための運営技術が必要である。遺跡が本来どのような様相をしていたかを現地でビジュアルに示すことは、遺跡の理解にとって極めて有効であることは論を俟たないだろう。

このため発掘された遺跡の遺構表現の手法には、①遺構そのものを屋内外で展示する遺構露出展示や、②遺構は保存のために埋め戻した上で、その真上に遺構模型（レプリカ）を展示する遺構複製展示、③遺構の位置や範囲を示す遺構平面表示、④建物の基壇・柱・壁などを建築材料や植栽などで一部立ち上げて表現する遺構立体展示、⑤存在したであろう建築物や構造物などを原寸大で復元する復元展示、などが行われてきた。また、遺構の真上とは限らず

に設けられた解説施設には説明板の他、⑥屋内外での縮小模型の展示、⑦屋内外での原寸大模型の展示、などがある。

ここでは遺跡における往時の様相を示す①～⑦の表現手法を基本にしつつも、さらに工夫をしている具体的な事例を若干取り上げ、遺跡整備における往時の様相のこれまでの表現方法を振り返っておく。

2. これまでの表現方法

①遺構露出展示

覆屋を架けて遺構の露出展示をする遺構展示館では、検出遺構をそのまま展示している場合が多いが、史跡福岡城内（福岡市）にある史跡鴻臚館跡の遺構展示館では、建物遺構の上で往時の建物を原寸大の模型で表現しており、一部は遺構の上に浮かせて表現している（図1）。

史跡葉佐池古墳（愛媛県松山市）の一号石室は未



図1 鴻臚館跡遺構展示館 遺構展示と建物模型



図2 史跡葉佐池古墳 一号石室内模型展示

盗掘の状態が発掘調査がなされ、記紀に記される「もがり」という古代の葬送儀礼が実際に行われていたことを実証した貴重な遺構である。覆屋を架けた石室は露出させ、その床面では2回目の追葬時の様子をFRP模型で再現して展示している（図2）。

②遺構複製展示

特別史跡平城宮跡（奈良市）の内裏の井戸跡では、遺構を埋め戻した上で遺構のFRP型取り模型の展示を行い、説明板の中ではほぼ視点を合わせた復元的なイラストを展示している（図3・4）。

③遺構平面表示

史跡上之国館跡（北海道上之国町）の勝山館跡では、建物跡の平面表示に加え、説明板にはその視点に近い位置での復元CGを展示している（図5）。



図3 平城宮跡内裏井戸 遺構型取り模型



図4 平城宮跡内裏井戸模型説明板

④遺構立体表示

史跡下野国分寺跡（栃木県下野市）では塔の基壇復元がなされているが、七重塔の復元図を透明なアクリル板に描いて看板状にし、遠方より重ねて見ることによって七重塔の高さなどが実感できるような工夫を仮設物を用いて行っている（図6）。

指定文化財ではないが、大分県中津市の沖代地区条里跡を望める高台の展望施設でも、透明なアクリル板に条里地割の復元図をパースペクティブに描いて掲げており、実景と重ね合わすことによって条里跡を理解できるようにしている（図7）。

史跡下高橋官衙遺跡（福岡県大刀洗町）の整備では、正倉院跡は区画溝の復元整備、建物跡の平面表示を行っている。それを望む東屋には、古代の建物



図5 上之国館勝山館跡 説明板の復元パース



図6 下野国分寺跡塔跡 復元基壇に重ねる復元図

のイラストを透明フィルムに貼り付けたのぞきメガネを設置しており、往時の様子がわかるようにしている（図8）。

⑤復元展示

往時の様相が理解しやすい展示手法が建物等の復元展示であり、史跡等では厳しい審査を経て建物が復元されている。史跡吉川氏城館跡（広島県北広島町）の万徳院跡では風呂屋形を復元しており、竈の湯を屋形に引き込み蒸気を浴びる蒸風呂形式の入浴を体験できる。この復元建物は本来の建物の特殊機能も体験できる点が特徴的であり、視覚のみでない空間の追体験も可能なことは復元展示の特長と言えよう。



図7 仲代地区条里跡 展望施設



図8 下高橋官衙遺跡 れきしびじょん
(写真提供：大刀洗町 赤川正秀氏)

⑥縮小模型展示

史跡秋田城跡（秋田市）の政庁域の整備では、東門と東面築地および北面築地の一部の建物を復元しているが、正殿跡等は平面表示を行い復元展示はしていない。このため、政庁の外側に1/20と1/50の復元模型を設置して、政庁内部の様相を知る一助としている（図9）。

⑦原寸大模型展示

史跡浦添城跡（沖縄県浦添市）の北斜面には浦添ようどれと呼ばれる琉球王国の英祖王と尚寧王の陵墓があるが、内部は公開していない。近くのガイダンス施設浦添グスク・ようどれ館においては英祖王の西室をFRPで型取りしてリアルに再現しており、墓室内部を擬似体験できるようにしている（図10）。



図9 秋田城正庁跡 1/20模型



図10 浦添グスク・ようどれ館 墓室内部再現展示

史跡上淀廃寺跡（鳥取県米子市）の整備では、金堂跡は基壇復元、塔跡はGRC型取り模型を設置している。様々な制約があり現地で金堂とその内部空間を復元することはできないが、近くのガイダンス施設において三尊仏や壁画のある往時の金堂の内部空間を原寸大の模型で再現している（図11）。

以上のように、各地の遺跡では①から⑦のような様々な遺構の展示手法に加えて、固定的な場所からに限られるが、イラストやCGなどの展示によって往時の様子をわかりやすくするための解説施設の整備や工夫が行われてきたのである。

2. 新しい表現方法

一方で、5年くらい前からQRコードを用いた展

示解説も行われている。史跡小牧野遺跡（青森市）では、樹林地に囲まれた中で環状列石の露出展示を行っている。縄文時代の雰囲気を壊さないようにするため、できるだけ現代的なサインなどは排除しており、詳細な説明文は名称板につけられた二次元バーコードを利用して携帯電話やスマートフォンで読むことができるようにしている（図12）。

そしてここ数年では、遺跡の活用においてはスマートフォンやタブレット端末を使ったデジタルコンテンツを用いて、詳しい情報は文字や画像・映像・音声で取得できるだけでなく、遺跡の往時の様子を現地の様々な視点からビジュアルに体感できるようになったことは以下の報告にある通りである（図13・14）。遺跡の現地でなくとも、ヘッドマウン



図11 上淀廃寺跡ガイダンス施設
上淀廃寺全堂内部復展示



図13 本研究集会 平城宮第二次大極殿跡での
デモンストレーションの様子



図12 小牧野遺跡 名称板



図14 第二次大極殿跡でのAR表示



図15 本研究集会 講堂内での
デモンストレーションの様子



図16 ヘッドマウントディスプレイの試用状況

トディスプレイを用いると高い没入感が得られるようになっている（図15・16）。では、上記のような施設や工夫は不要になってしまうのだろうか・・・。

遺跡におけるデジタルコンテンツの利用の進展は、遺跡における遺構等の表現に関わる計画を変えうるものであり、史跡等のマネジメントの根幹である保存活用計画や、ハードとしての遺跡の整備をどのように考えるべきかについても検討を迫っていると言える。